

巻 頭 言

京都市立病院紀要 38 巻 1 号が完成しました。本号は第 15 回合同研究発表会の演題，並びに海外研修報告で構成されております。各部門の研究成果・実践報告であります。多職種で連携・協働し、患者をチームで支える内容の発表が、年々増えていることを感じております。

迎えた平成 30 年度は第 7 次医療計画，第 7 期介護保険事業計画，第 3 次医療費適正化計画がスタートし，地域包括ケアシステムの構築，推進を軸に診療報酬・介護報酬の同時改定が行われました。本改定は 2025 年の更に分先を見据え，「治す医療」から「治し支える医療」へと移行する地域包括ケアシステムの構築を推進するものであり，その方向へと大きく舵が切られたことを実感するものでした。

我々はこの地域包括ケアシステムの「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう，住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される」仕組みの 1 つとしてその役割を果たしていかなければなりません。地域包括ケアシステムにおいて要となるのは「連携」です。現在，当院で行われている多職種連携の活動が院内に留まらず，更に地域の方々との連携へ広がっていくことが求められています。本号に掲載された“経口摂取増加を目指す”取り組みや“脳卒中患者の ADL カンファレンス”の取り組みが，患者の「住まい」「地域コミュニティ」の場で継続され，生活を可能にするための「連携」となることが重要と考えます。

その為には医療と介護のみで完結せず，福祉，保健，地域自治会等，広い視野での協働・連携を目指さなければなりません。

まさに“地域と一体となって健康長寿のまちづくりに貢献する”という当院の理念の実現へ“協働”と“連携”の視点で取り組んでいきたいと思ひます。

結びにあたり，本号の執筆・編集にご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。

平成 30 年 9 月

京都市立病院

看護部長 半場江利子

